

Fumiaki Akahane

Imaki

Lands

They

20

Genki Isayama

——〇一四年一〇月、アーティストの赤羽史亮
さん、諫山元貴さん、黒田大スケさん、グ
ラフィックデザイナーの牧寿次郎さんを愛媛県今
治市に招待し、川治町の旅をしました。Imabari
Landscapesが一〇一八年より愛媛県今治市で運転
しているアートプロジェクトのひとつ、「Imabari
Landscapes They Saw」Vol. 4」がたつます。そ
こで船を出るんだが、本デサインハンドル。

Imabari Landscapesは「身近なアートがある暮
る」や「ハヤカワ」、地域に住む一人一人
が、多様で、自分で生き方を選択できる土壤
の醸成を目指してます。活動の一本柱は、ゲ
ストと今治を旅する「Imabari Landscapes They
Saw」と展覧会「ART SANPO」です。一〇一八年と
一〇二〇年、一〇二一年は「Imabari Landscapes
They Saw」Vol. 1~Vol. 2、vol. 3を実施しました。
わざわざ「ART SANPO」せ一〇一一年にステ
ートしました。新型コロナウイルス感染症の拡大
によつて人の移動が難しくなり、それまでのよう
に街に人を招き入れる企画を実行することが難し
くなりました。そこで、人の代わりにアート作品
が今治市内の店舗を回遊する展覧会「ART SANPO」を
始めました。赤羽さんはART SANPO 2023の参加作
家で、牧寿次郎さんはART SANPOの作家を三
度「デザインして」ただきました。

Vol. 4の今回で、二年目一度、本アートを

実施するルートワークになつてきました
ので、これまでのImabari Landscapesの企画に

田 次

関わってくれていた赤羽さんと牧さんにお世がけ
するといひながら始めた。その後、ART SANPO
という展覧会形式では紹介するのが難しい映像作
家の諫山さん、黒田さんを招待しました。

これまで三回アートワークを実施してきて気がつ
いたことがあります、参加者同士が今治で初めて対面す
ると、川治町の旅を通じて面白い化学反応
が起ります、感じました。その経験をもとに
ゲスト同士のマッチングを図りました。黒田さん
が交通機関のアクションで途中参加になつてしま
いましたが、様々なアクティビティを通じてお
互いの関係性を深めながら、和気藹々とした雰囲
気が醸成され、その雰囲気がトークイベント会場
から最後の打ち上げにまで繋がったように感じま
す。

プロジェクトを始めてはや七年。初めは右も左も
分からぬまま、アートプロジェクトを立ち上
げましたが、少しずつ自分が提案したいアートと
の関わり方の輪郭が浮かび上がつてきてるよう
に感じます。それに伴い、心強い仲間も増えてき
ました。なんでもある都合とは異なり、「ないな
ら作ろう」精神を養うことが地方に生活する醍醐
味だと改めて感じます。小さな点かもしれません
が、幾つもの点がいつか線になり、やがてには大き
な面に広がることを期待して、これからも継続
的に、身近にアートがあふ暮らしを提案し続けた
いです。

はじめに・田次
今治旅を振り返る

今治田記 赤羽史亮
先に人 諫山元貴
今治滞在記 黒田大スケ
今治の風景 牧寿次郎

愛

媛県今治市は、瀬戸内海に面した愛媛県第二の都市で、織維産業や造船業が盛んな街です。広島県尾道市と今治市を結ぶ全長約60kmの「瀬戸内しまなみ海道」は、近年サイクリストの聖地として知られ、海外からの訪問客も増えてきています。

今回、彼らを招待するにあたり、瀬戸内海の穏やかな海やそこに浮かぶ島々とともに巡り、海事都市として発展した街の歴史を紹介したいと思いました。そこで、しまなみ海道でサイクリングをして、隈研吾氏による設計として知られるパノラマ展望台が魅力の亀老山展望公園や、日露戦争当時、ロシア艦隊の来襲に備えて造られた芸予要塞を訪れました。あわせて、地元の産業である造船所やタオル工場の見学、今治市内に点在する丹下健三建築ツアーを行いました。夜は、地元の獲れたての魚、鉄板で焼き上げることで有名な今治焼き鳥が食べられるお店で今治に住む方々との交流を深めました。



今治旅を振り返る

十月四日(金)

10時

赤羽・牧到着@松山空港

11時15分

諫山合流@サンライズ糸山

11時半~12時半

昼食@伊豫水軍

13時~14時半

タオル工場見学@株式会社丹後しまなみ海道サイクリング

15時半

亀老山

17時~18時

夕食@鳥林

19時

二次会@ジャグ

十月五日(土)

8時

フェリー 造船所見学

11時~13時

耕三寺見学

13時半~14時半

黒田合流@大三島

15時~16時

ところミュージアム見学

17時~18時

丹下建築めぐり

19時

夕食@万作

10時

朝食@珈琲道場

11時

フェリー 芸予要塞見学

12時

昼食@かねと食堂

13時

作戦会議@Abony トーク準備

14時~15時

トーク@今治木木木座

15時

夕食@焼鳥パーク

16時半~18時半

赤羽出発@松山空港

17時

朝食@アメリカ

18時半

諫山・黒田・牧出発@今治駅

19時

赤羽出発@松山空港

四人のアーティストは、二七枚撮りのレンズ付きフィルム「写ルンです」を片手に三泊四日の旅をしました。彼らの目に、今治はどのように映ったのでしょうか。彼らが撮影した写真とともに、旅の感想を紹介します。

僕

は四国に行つたことがなかつたけれど、四国の愛媛県今治市に行くことになった。周

「どうも、どうも。」の仕事の別のこと、
ろに詳しく述べてあると思つかれ言及しないけれど、Imabari Landscapesが一體なんのかはおそ
らく周山さんも本当はわかつていらない。それは周
山さんが作ったものだけど、僕は作った本人の意
図を超えていくようなバイブルを感じて、面白い
と思ったから、周山さんから、作品が今治市内の
店舗を巡回するART SANPO 2023の誘いがあつたと
きも「是非！」と即答した。今回ももちろん「是
非！」と即答した。

今回一緒に旅する三人のうち、牧くん以外は会つたことが無い人達だつた。でも、初めて会つたのに初めて会つた気がしない人が世の中にはいるけれど、諫山くんも黒田さんもそういう人だつた。周山さんも初めて会つたときそう思った。牧くんは大学の違う学科の同級生だ。大学時代話したことはなかつたけど、キャンパスや授業で見かけていて顔は覚えていた。卒業後は僕が参加したグループ展のチラシを牧くんがデザインしてしたりで何回か会つたことがある、けれども、あんまり話したことは無い、というような感じだつた。

一〇月三日(前日)
朝八時、成田発の飛行機だったので成田のドミト

リーに前泊した。ドミトリーの玄関に煙草を吸いに行つたらオーストリア人の若い男の子がいて挨拶した。しばらくして、また煙草を吸いに行つた。

を丹後さんという女性の方に案内していただき
た。僕はノイズミユージックが好きだからタオ
レモ裁の幾度バーノバーバーバーバーバーバ

が新しい型の高速織り機があつてそれは日本製で、それで丹後さんは、安定を求めて学校の先生になつたが、結婚して、紆余曲折あり、土産に即購入した。

案内していくださつた丹後さんは、安定期間稼働してゐるんですか?」と質問したら、「みんな一七時に帰ります」ということだった。働いている人はみんなニコニコしていた。「二四時間稼働してゐるんですか?」と質問したら、「みんな一七時に帰ります」ということだった。働いている人はみんなニコニコしていた。働く時間は少ない方がいいに決まっていた。タオルはふわふわでオシャレだったのでお土産に即購入した。



ら、またおつきのオーストリア人の男の子がいて仲良くなつた。僕が「I'm a painter」(僕は画家だ)」と言つた男の子は「I'm a fire bartender」(僕はファイヤーバーテンダーだ)」と言つた。写真を見せてもらつたら、口から火を吹くパフォーマーだった。火吹き男だ。

朝、長野からお土産を買つてくる約束をしていたのを完全に忘れていたことに気がついた。代わりに成田空港でクッキーを購入した。

さんは悪天候で飛行機が欠航したため二日目から合流することになった。

できない、これからも予想できないことが起こる
と思うけれどそれで良い、と言つていた。
そのあと、しまなみ海道をサイクリングすること
になつた。自転車で来島海峡大橋を大島に向かつ
て走つていると、大島の海岸が見えて、それが僕
の一番好きな映画『青春デンデケデケデケ』に出
てきそうな風景で興奮した。橋の下の海はいろんな
ところで渦を巻いており、今でも船がときどき
座礁する航海の難所なんだそうだ。

当初、大島には自転車では上陸せずに一旦引き返して皆で車で行く予定だったけれど、僕と牧くんの二人は大島にある亀老山の山頂まで自転車で目指すことにした。「行くつしょ！」というノリになつたからだ。自転車で走りながら僕の絵や僕のやつている障がい者ヘルパーの仕事の話や、牧くんのデザインの仕事の話をした。牧くんの心の奥にグググと熱いモノがあることがわかつた。でも、それは元々知っていた。改めて確認した、つ

山頂に着いて綺麗な景色を見た。

移動の車の中で牧くんが佐塚のモノマネをしたら
凄く上手だった。

今治日記

一〇月五日(二日目)

そのあと、焼き鳥のお店「鳥林」に周山さんが連れていってくれた。今治焼き鳥(焼き鳥が串に刺さっていない)はとっても美味しかった。活気のあるお店で、僕は普段長野で飲み屋にはほぼ行かないから、こういう飲み屋に飢えていた。嬉しかった。周山さんは運転があるので、牧くんと諫山くんはお酒を普段から飲まないので、僕だけお酒を頼んだ。僕はビールを中ジョッキ一杯飲んだ。

その後、「ジャグ」というジャズが流れるログハウス風の喫茶店に連れていった。

僕はザクロミルクを注文した。飲んだことのないものを飲みたかったからだ。みんなアイスココア

やライスコーヒーやら、めいめい違う飲み物を

たのんだら、ちょっと怖そうなマスターが「全員違うものたのみやがって」と笑っていた。今治の

お店の人は最初ちょっと高圧的で、でも実は優しく思つた。僕はジャズもログハウスも煙草が吸える喫茶店も大好きなので嬉しかった。諫山くんも喫煙者なので嬉しそうだった。諫山くんに新宿にある全席喫煙可の喫茶店「ピース」を教えてあげた。

夜、ホテルに戻った。この旅では諫山くんとずっと相部屋だ。部屋で諫山くんと家族のことなど、いろいろ話した。諫山くんは広島在住でトシさんと仲良しだとわかつた。トシさんと釣りに行つてまた飲みたいと思った。寝た。



船の材料の鉄の板は二〇mmから八〇mmの厚さがあるけれど、何十枚もの巨大な板になると、たぶんで、巨大な折り紙のようになるそうだ。船はその巨大な鉄の板を何層にも重ねたり、組み合わせたりして造る。溶接工の人達はその層の中に入り込んで作業するそうで、船が完成に近づいていくとみんな鉄の層の内部に入つて作業するようになるので、外からは人影が消える、という話を聞いた。蜂の巣や蟻の巣みたいで返してくれた。造船所の人達はゴミ箱でも、バコを吸っていた。僕は外国人労働者の人もタバコを吸っている人も好きだ。挨拶したら笑顔で返してくれた。造船所の人達はゴミ箱でも、休憩所の屋根でも、なんでも鉄を溶接して作ってしまう、なので全部重い、という話を聞いた。それはとつても良いことに思えた。船尾に付いているプロペラが金色でピカピカしていて

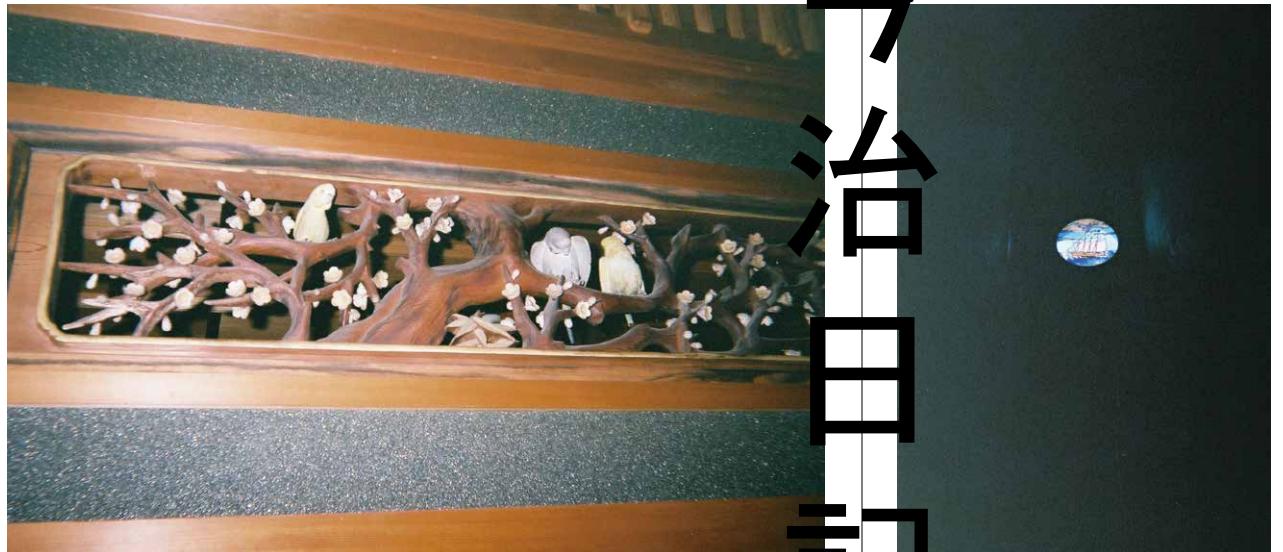
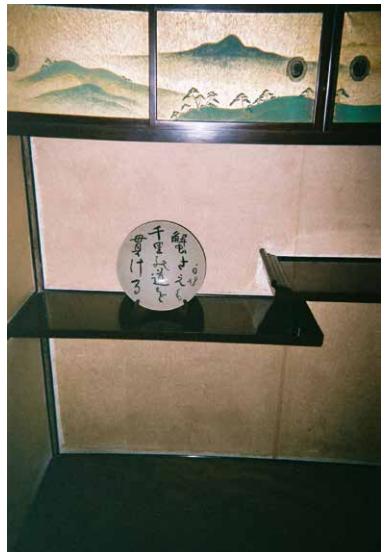
カツコよかったです。もらったパンフレットに丸い地

球とそれをバスケットボールを持つように包み込む手のイメージの写真が大きく載っていて、とても暴力的なイメージだと思った。

そのあと耕三寺というお寺に連れて行つてもらつた。耕三寺くん、というとても若い副住職さんに案内してもらつた。耕三寺くんのメガネは光が当たるとレンズが黒くなつてサングラスになるという優れもので、「あ、今サングラスになつてる」（屋外に出たからだ）、「だんだん、黒が薄くなつてきてる」、「あ、メガネに戻つた」（屋内に入つたからだ）と思いながら案内を聞いた。耕三寺は淨土真宗のお寺で、僕は親鸞にずっと興味があつたので親近感を持つた。お寺の中にはいろんな有名なお寺を模した建造物が沢山あつて、仏教のミューズメントプレイスだ、と思った。中でも千佛洞地獄峠という洞穴に僕は興奮した。僕は昔から穴や地獄が好きだ。洞穴や鍾乳洞にいつも心惹かれている。千佛洞地獄峠の中にはいろんな地獄を説明する絵や沢山の石仏があつた。「写ルンです」で写真を沢山撮つた。

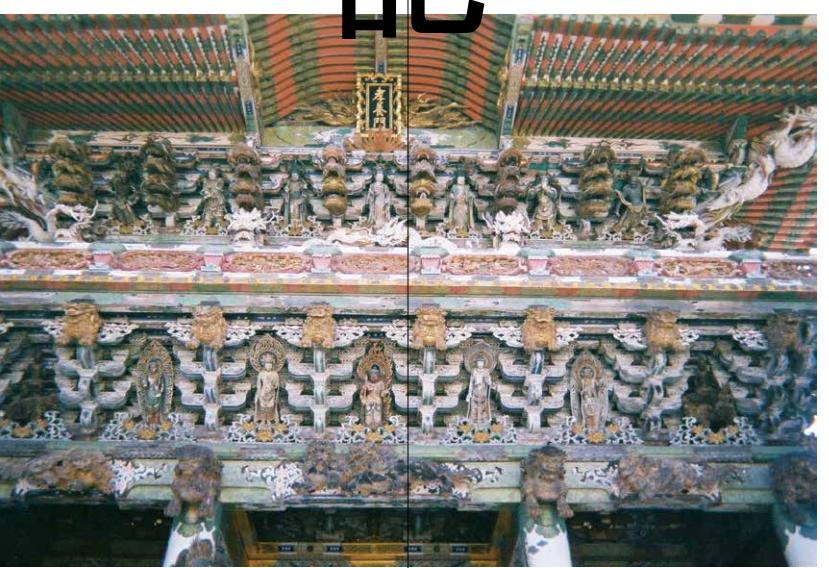


今
治
日
記



千佛洞地獄峠を出たあと、耕三寺の中にある「未来心の丘」という大理石でできた山に登つた。ここには杭谷一東さんという彫刻家の大理石の彫刻が沢山あつた。彫刻も大理石だけれど、地面も全部大理石だった。スキー場がまぶしいのと同じ原理で大理石の山はまぶしかつた。耕三寺くんの眼鏡は完全にサングラスになつていて。その後耕三寺の隣にある耕三寺博物館でお茶の道具や秀吉の手紙などを見て、お寺の近くのお店で、タコ飯をご馳走になつた。僕はタコ飯を生まれて初めて食べたけれど美味しかつた。

耕三寺を出てしばらく車で移動して黒田さんと合流した。車がぱんぱんになつた。やつと全員そろつたとみんな嬉しそうだつた。黒田さんが「写ルンです」で車中の写真を撮つた。他の人は諫山くんのことを「諫山くん」と呼ぶけど、黒田さんと諫山くんは一〇年来の付き合いでも、諫山くんの方が年下なので、黒田さんだけは「イサヤマ！」と呼んでいて、良いなあと思った。僕は今回「諫山」という苗字に人生で初めて触れたので、心の中で「イサヤマ」



なのか「イソヤマ」なのかわからなくなったり、「イ」しか思い出せなかつたりしていた。

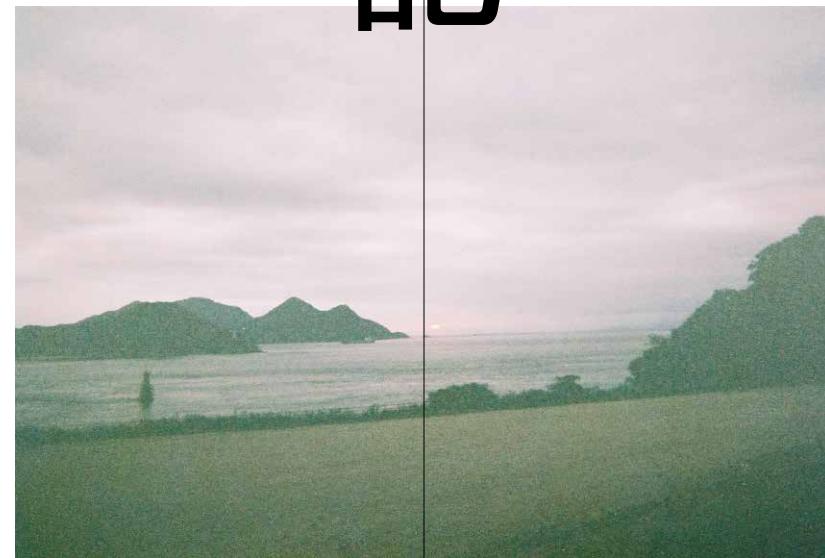
そのあと、「ところミュージアム」という美術館に連れていつてもらつた。僕は大竹伸朗が好きなので昔見た大竹伸朗の図録の展示歴のところに「ギャラリーとこる」という文字があつたのを覚えていたので「ところミュージアム」と関係があるかもしれないと思つたけれど、それはよくわからなかつた。

そのあと、建築家の長井信彦さんに今治市内に点在するに丹下健三の建築を案内してもらつた。僕は建築に詳しくないので、ウルトラマンやウルトラセブンに出てくる建物みたいだと思っていた。「ここ」で展覧会したいね」などと周山さんと話した。

建築を巡る道中、黒田さんは街中にあるブロンズ彫刻に詳しくて、「この人は日展の審査員をしていた人で……」とか凄く詳しく説明してくれた。諫山くんが「ちょっとそこまではわからないです……」と言つていた。その他にも黒田さんは防空壕のあつた場所が地図からわかると言つて



今治日記



いた。凄い。

商店街を歩いていたら、お祭りをやつていた。とつても立派な商店街だけど、普段は人がいない、と周山さんが嘆いていた。お祭りだからか、お店の看板がズラーッと光っていたけれど、ほとんどのお店がすでに閉店してしまっている、とのことだつた。僕の住んでいる長野もそうだけど、人が少なくなつていて。子供が少ない。僕のじいちゃんは八人兄弟だったけど、僕は三人兄弟で、僕の子供は一人しかいない。昔の方がみんな貧乏だったというけれど、昔の方が子供を沢山作つていて。僕の妻のさくらが去年カンボジアに旅行で行つたときホテルの従業員や街の人たちに若い人が多くて驚いた、と言つていたのを思い出した。

タコ飯はお刺身の美味しいお店に行つた。僕と諫山くんと牧くんが先に着いて、あきさんが来て、少し遅れて周山さんと黒田さんと長井さんが来た。お刺身のマグロが凄く美味しかつた。でも今治で捕れたものではないらしかつた。途中、長井さんがひとりでずっと喋つていたので周山さんが怒つた。長井さんは笑顔で帰つていった。あきさんが、



マツダの車のフォルムは船のフォルムに近い、と言つて、本当に船が好きなんだなあ、と思つた。僕はビール中ジョッキ一杯とハイボール一杯を飲んだ。

宿に戻つて風呂に入り、諫山くんといろいろギヤラリーのことなど話して寝た。

一〇月六日(三田田)

朝早起きしてひとりで近くの海に釣りに行つた。ちょうど朝日が昇るところが見れた。海から出てくる時に太陽がオレンジ色になつてた。普段使つてて渓流用スプーンを投げたけど何も反応は無かつた。周りに何人か釣り人はいたけど誰も釣れて無さそつた。一個スプーンを岩に挟んで無くしてホテルに戻つた。僕は今まで、フランスと沖縄と今治の計三回、海で釣りをしたけれど、フランスでシーバスが一匹釣れた他はボウズだ。宿に戻つて、みんなで珈琲道場という喫茶店に行つた。モーニングでポテトサラダサンドを食べた。

そのあと波止浜港から小さなフェリーに乗つて、小島という小さい島にある芸予要塞という日露戦争に備えて作られた要塞の跡地を見に行つた。港で周山さんがフェリーのチケットを買つているのを皆で話しながら待つてると、突然おじいさんが会話を参加してきた。その人は周山さんがツアーガイドを頼んでいた八四歳の葛西さんというガイダンさんで、ニコニコ笑顔で今治の歴史の話をしてくれた。フェリーが到着して皆で乗り込んだ。釣り竿を持った人たちも何人か乗り込んできた。何が釣れるのか聞いたけれど今はもう覚えて

今治日記

さんは楽しそうに山を登つていたので、ガイドの仕事はファックではない、と思った。

帰り道に葛西さんに、小さい頃、車が無かつた時は移動はどうしてたのか、聞いたら「徒步！」と言つてた。またフェリーに乗つて今治市街のほうに戻つた。

移動の車中で志水児王さんの話になつた。志水さんは僕が浪人生の時、長野県松本市にあるマツモトアートセンターという予備校で教わつた先生で、僕が人生で初めて出会つた現代美術のアーティストだ。今は広島にて黒田さんも諫山くんも知り合つた。二人とも志水さんは声が小さいと言つてた。僕は志水さんに二〇年くらい会つてない。

お昼の定食屋では周山さんはオムライスを頼んだけれど、僕はカツカレー大盛、諫山くんはカツカレー、牧くんはカツ丼、黒田さんはカツ丼大盛を頼んだ。みんなカツだ。トークイベントに向けて気合いが入つてた。周山さんが「私もカツ食べないと！ちようだい！」と僕のカツカレーのカツを一切れパクッと食べた。

トークイベントまで時間があつたので喫茶アボニーでみんなでダラダラした。晴れててポカポカしていたので、黒田さんが眠たそうな顔で「眠いですね」と言つていて、僕もウトウトした。トークイベントに向けて程よい緊張感があつた。

トークイベントは、今治木木木座という普段は音楽をメインにやつてて多目的スペースで行われた。会場準備をしてて今治木木木座の壁に「ASA-CHANG&巡礼だ！」と並んで今治木木木座の



吾一さんが「ASA-CHANG&巡礼、最高ですねー！」と応えてくれた。ASA-CHANG&巡礼のASA-CHANGは

大学時代一緒にバンドをやっていた菊ちゃん(菊川恵里佳)がドラマを習つていたので親近感がある。近くのライブハウスに椅子を借りに行く車中で吾一さんと「OGRE YOU ASSHOLE」やジム・オルークの話をした。

コンビニに飲み物を買いに行った時、周山さんが初日の僕は臭かったけど一日目からは大丈夫だったと教えてくれた。四年前、「CAVE-AYUMI GALLERY」の鈴木歩さんと画家の中村太一くんとバルセロナに行つたとき、宿でウンコの匂いがして、バルセロナはよく犬の糞が落ちていたからみんなの靴の裏を見たけれど誰もウンコを踏んでいなくて、結局僕の足の臭いがウンコの匂いだった時のこと思い出した。

トークイベントでは僕が予定時間より喋りすぎたりしたけれど、順調だつた。トークイベントの最後にお客さんから「今後の目標は？」と聞かれて「海外で発表したいです！」と答えた周山さんがこっちを見てグッと親指を立てた。トークが終わつたあと、お客さん達の顔を見てこのイベントは成功したんだと確信した。みんない顔してたからだ。嬉しかつた。

打ち上げで多くの人と話した。みんな心の奥の方にグググと熱いモノがあるのがわかつた。それが打ち上げのエンジンになつて打ち上げは大いに盛り上がつた。

途中、尾竹^{※3}から電話があつた。出ると、体調が悪いとのこと、妻のさくらもそうだけれど、パレスチナのことがきっかけで体調を崩している人が



うどんを食べて、まだ時間があつたので喫茶店でコーヒーと一緒にモンブランを食べて、飛行機に乗つて帰つた。(赤羽)

今治田記



一〇月七日(四日目・最終日)

今日は最終日だ。朝起きてみんなでモーニングを

食べに行つた。僕はカレーを食べた。

そのあと、今治駅に行つた。黒田さんと牧くんは電車、諫山くんは車、僕は飛行機なので、ここでお別れだ。牧くんが「この旅でほんとの同級生になつたつて感じだね」と言つた。最後にみんなで握手をして別れた。けつこう寂しかつた。せつかく仲良くなつたのに、という気持ちだつた。飛行機の時間までまだ時間があつたので、周さんは僕を道後温泉まで連れて行ってくれた。僕だけ温泉に入つて、そのあと周山さんと大黒

身近に多い。

会場に戻つたら周山さんが「席替えするよー！」と言つていて、席替えをした。大分から来た安藤くんとアナキズムの本の話をした。僕はビール中ジョッキ一杯とハイボール三杯を飲んだ。僕たちはホテルの門限があるので二次会には参加せず帰つた。

- ※1 美術家の佐塚真啓のこと。国立奥多摩美術館の館長である。
- ※2 画家の小西紀行のこと。
- ※3 友人でアーティストの尾竹隆一郎のこと。
- ※4 画家の加藤泉さんのこと。

最初 初にお断りしておくが、私は文章を書くの

が苦手なため、以下は私が話したことを文字起こししたものをベースに編集したものである。

私は「Imabari Landscapes They Saw」（以下、頭文字を取つて「ILT」とする）が、ある種のアーティスト・イン・レジデンス（以下、レジデンス）という認識で参加した。しかし、これまで参加したレジデンスとは違っていた。私が参加したレジデンスの数は少ないが、それらはその土地に数週間ほど滞在し、その土地で地元の人々に会うことは希望すれば任意であったし、自分で（またはそのレジデンスのコーディネーターや運営の方と一緒に）その土地を散策し、最後はその経験やリサーチを通して、展示というかたちで作品を発表するものであつたと思う。

一方でILTは、ほぼ初対面の四人が周山さんに今治の各場所を案内してもらって、共に行動し、最終日にはお客様の前で周山さんがファシリテーターを務め、四人の自己紹介的なトークに加え、各自のアートに対する見解等を発表、その後居酒屋にて今治の方々との懇親会をする形式のものであった。ちょっとと話は飛びが、ほぼ初対面の四人が共に行動することも相まってか、大人になつてから仲良くなる人ができるのは面白い体験だった。初日のILTでは恒例（？）のサイクリングがあつた。運動不足の身体にムチを打ちながら、しかし心地よい風を感じながら、足がぱんぱんになる。全身で瀬戸内海を感じた。

話を戻すが、レジデンスプログラムにおいて私が考える作家像があるとしたら、それはその場所に作品で何らかのアクションをおこす人だと思う。が、ILTは、作品ではなく、お客様（未来の観賞者？）が、先に人（アーティスト、デザイナー）と出会うこと目的としている珍しいかたちのレジデンスプログラムだったんじゃないかなと思う。ILTに参加するなかで、今治の土地について（周山さんにとって？）これは一体何なのか、何のためのILTか考えてみたいと思った。

それは、これから仮に今治で制作や作品を展示するとした場合の前座戦だったように思う。その四人はまず、自分（いうなればアーティストやデザイナーのキャリアとか）を消して今治を体験、大人の社会科見学をし、周山さんの今治での知り合いに（今回は広島県の生口島にある耕三寺の副住職にも）会つて交流を深める。トークは各作家のこれまでの経歴や作品を紹介するものであつたが、話すときの作家の振る舞いを含めて、誰がどのような話をするのかをお客さんが聞くことで、今治の人々が実際の作家に先ず出会い、理解まではいかないとしても、認識する。当たり前だがこれは故人の作家ではできないから、現存作家が参加するプログラムならではだ。またそれは、いわゆる難解な作品と言われるものの現代美術を、今後今治で展示したとしても、ILTという先に作家に出会いうプログラムがあることで地元の人にはある種の安心感が生まれ、アートへの出会いの間口を広げるのではないかと感じた。



あつ、もし今後展示する機会があったとしたら、場所は今回訪れた丹下建築が面倒そうだ。丹下健三は愛媛県で中学時代過ごしていったこともあり、愛媛には丹下建築がいくつかある。今回、その案内も周山さんの知り合いの建築家の方にツアーをしていただいた。そのツアー中、丹下がコルビュジエに会ってはないが、モダニズム建築っぽいものをつくったという事実を知り、それを深掘りして、この建築の中で展示するはどうなるだろうかということも想いながら、何か新たな発見があるかもと思ったのは別の話。

そういうえば、私が思う周山さんという人物の印象も書いておきたい。

周山さんと初めて会った時、正直、初対面の人との距離感がバグってる人だなと思つた。しかしその後、私の広島や高知での展示に来てくれたり、逆に私が今治へ行つたりして交流を続けた。「ART SANPO」という、五・六名の作家の各作品が一ヶ月ごとに今治の飲食店や雑貨屋さんなどの店铺を移動していく(散歩していく)、一時的な展示鑑賞ではなく、馴染みのお店で何度も作品に出会う取り組みや、去年初め(周山さんが今治での活動を開始して六年目)今治市の支援で開催されたILTTSとは別のレジデンスプログラム「アーティスト・イン・今治」にも訪れたりして、話していくなかで、真摯にアートのことを考へているところが分かつてきた。そんなこともあり、次第にシンパシーを感じることができるようになつたと思う。やはりこういった再会が人を繋げていき、色々な偏見もほぐれていくのかなとしみじみ思つ

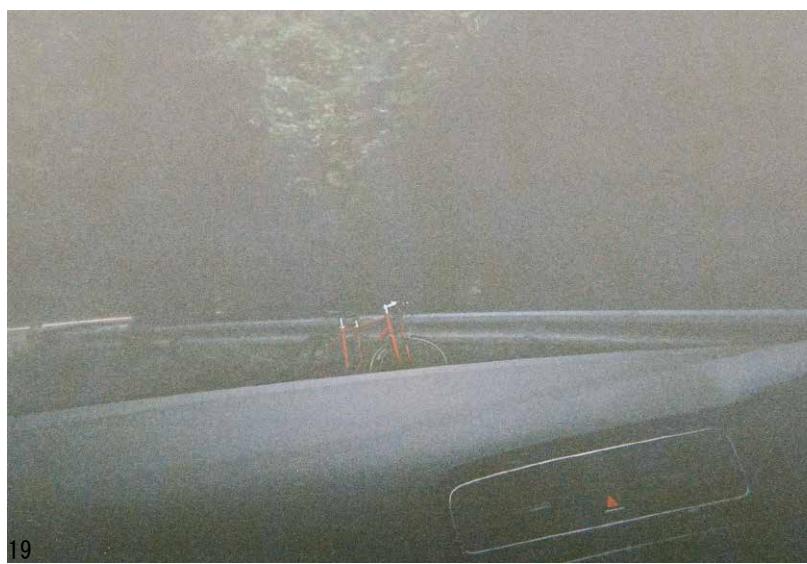
た。あと、アートを今治に根付かせるという、(ある意味で)一人相撲のような無駄砲な計画は、周山さんみたいな人がいないと、美術の土壤が少ないので土地では(当たり前だけど)かなり大変だ。だから、周山さんは開拓者的な人で貴重な存在だと思つた。

また話は飛ぶが、以前、高知の須崎市で実施されている「現代地方譚」というレジデンスプログラムに参加した。去年で一回目だった。この取り組みには須崎市の援助がある。そして実行委員会としてチームで運営している(チームと言つてもほとんど手弁当に近いので大変だが、今治での「アートを身边に」の取り組みはほぼ周山さんひとりでやつていて、そこは限界を感じることもあるだろうと思うし、ある程度の組織は必要だとも勝手ながら思った。ただ周山さんの熱意、また今治での人脈とこれまでの活動実績で、今後は少しずつだが活動の幅が拡大していきそうな予感があつたのも事実。ILTTSのトーク後の今治の方々との懇親会でも、運営面でも周山さんに協力したい人がいることが分かつたから、きっと大丈夫だろうな、とも思った。

最後にILTTSへ参加して改めて感じたこと。

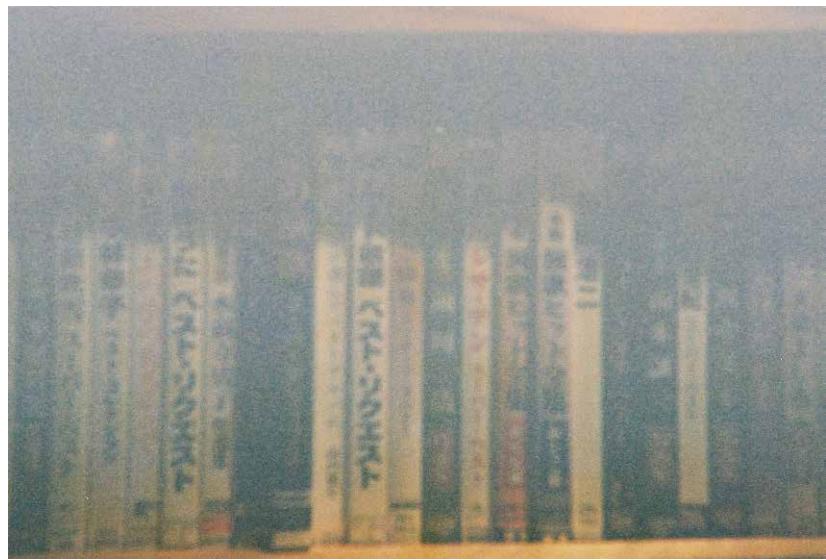
私も広島でささやかながら作家業とは別に、アートを地域に根ざす(したい)プログラムを二〇一二年から有志のチームを組んで進めている。自分にも新たな気づきもあり楽しいが、継続つて本当に大変だ。でも継続とはそれが日常に近づくことである。逆に継続しなければそれは日常から遠のいていく。外から展示のためだけにアーティ

先に人



ストやディレクターを招聘するのではなく、「地域に根付いた人がやるから、アートがゆっくり土地に根付いていく」という「アートを身边に」する取り組みを実践している大先輩の赤井あずみさんの言葉をふとしたときに思い出す（ちなみにこの言葉は「アーティスト・イン・今治」のトークイベント時のもの）。

今後も共に今治、広島と各々の場所で中国四国での「アートを身边に」という取り組みをささやかながら続けていきたいと感じたのだった。（諫山）

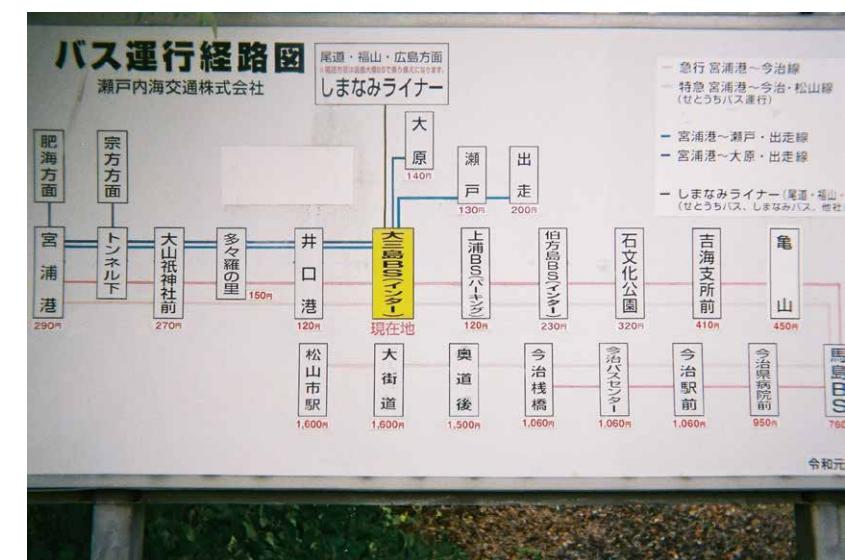
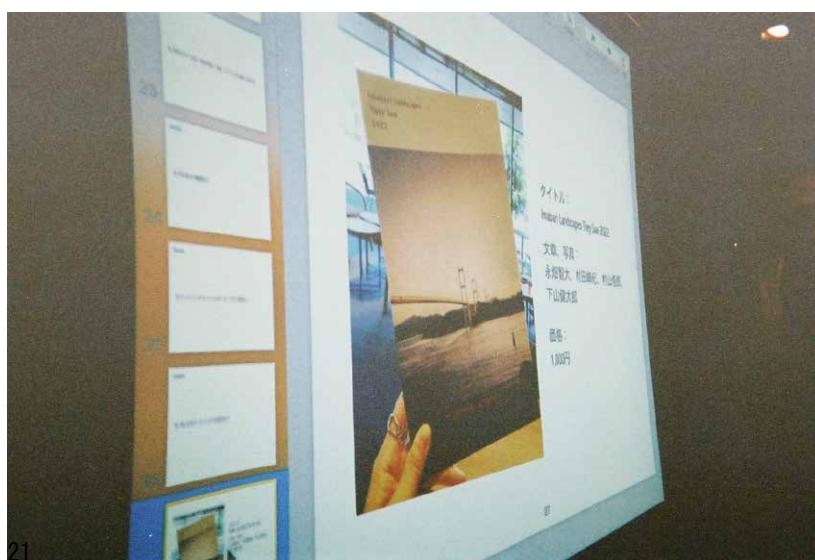


※5 現代地方譚

高知県須崎市で二〇一四年から続くアートプロジェクト。様々な表現者が地域に滞在し創作活動を行う「アーティスト・イン・レジデンス」、その成果発表と音楽・演劇公演や各種ワークショップ等、ジャンルを跨いで構成される地域の文化振興事業。

※6 赤井 あずみ

鳥取県立美術館に近現代美術担当の主任学芸員として勤める傍ら、鳥取市中心市街地の旧横田医院を活用したアート・プロジェクト「HOSPITALE」やプロジェクトスペース「ことめや」の企画運営に携わる。



私

昔、まだ浪人生だった頃、私は予備校に通うお金を稼ぐために、様々なアルバイトを掛け持ちして働き詰めの毎日を過ごしていました。朝から晩まで働くだけの毎日に、私は浪人生のはずなのに何をしているんだろうという焦りと不安に押しつぶされそうになりながらも、忙しい日々に任せて転がる様に過ごしていました。美術高校を卒業したとはいえ、全く経験も実績も無い只の生意気な若者だった私は、それでも自信だけはある、将来自分がどんな作品を作るのか、どんな芸術家になるのかを思い描いていました。私は多分、彫刻家になつて木彫作品を作るだろう。そしてアトリエにこもり寝食を忘れて制作に打ち込む。当時はそんな風に未来の自分を想像していました。

ある日、アルバイト先の仲の良い板前さんが「四条河原町の角に座っているオバちゃんの占い師、あの行列出来ているところ。あそこ当たるらしいから占つてもらつたら? お金出してあげる」と言つてきました。その板前さんは占いが好きな方で私に持ちかけてきたのでした。多分、自分が占つてもらうのは怖かったんだと思います。同時に、暗中模索の貧乏な若者を何か応援したい気持ちがあつたのかもしれません。今となつては確かめる術はありませんが、当時の私は、純粋に好奇心から「いいですね。いきましょう」と答えたのでした。バイトが終わつた深夜に占い師のいる交差点に向かうと、いつも何人も行列しているのに、その日に限つて誰もいません。もしもたくさん

記

ん並んでいたら、また今度と言つて、その日が来ないままだったかもしれません。その占い師は手相占いをする人で、私の手をまじまじ見てこう言いました。「あなたは何か、ウロウロとあちこちを飛び回る仕事をするようになりますね」。私はそれを聞いて少しがつかりしたのと同時に、何だ、データメなことを言うインチキじゃないのかと訝しました。だつて、私は芸術家を志しているわけですから、そんなバカなことがあるはずがありません。彫刻家が、家に、アトリエにこもつて制作するはずの彫刻家が、ウロウロあちこち飛び回るわけがないじゃないか。と、こう思ったわけです。他にも色々言われて、何となく当たつていう様な、しかし思つたような内容ではなく、お金を出してくれた板前さんも、私も、何か少しめがつかりして興醒めしてしまつたのでした。あれから二〇年ほど経つた今、驚くべきことに私はなんと、ウロウロとあちこちを飛び回る感じで芸術家として生きています。占い師が言つた通りとは言わないまでも、どう言うわけかそんな人生を歩んでいる私がいるわけです。不思議なことです。対馬から福岡へ向かい新幹線に乗つて福山へ、そして待ち合わせの大三島のバス停に向かうバスの中でほとほと疲れ切つた私は、瀬戸内の島々を見ながら、夢か走馬灯の如くグッタリとそんなことを思い出していました。二〇一四年の九月は、なぜか急に予定が詰まり、沖縄、東京、韓国、北海道、対馬と移動が続いていました。おまけに謎の強風で対馬から飛行機が飛ばず、Imabari Landscapesへは、すでに二日遅れての参加となつてついたこともあり、申し訳ない気持ちと疲れで精



大三島には戦後に大阪で活躍した女性彫刻家、羽柴小枝子さんの作品がまとまって保存展示されているという情報があつて、一度見に行けたらいなと思っていました。しかし情報が古く、今も展示してあるのか、どこに展示してあるのか掴みきれずにいました。私が大三島に上陸した時は、先に述べたように疲れ切ってグッタリしていました。何とかしてこの彫刻家の作品を探すこともできましたかも知れないのですが、その時は曖昧な情報を頼りに動く元気がありませんでした。また他の皆さんを振り回すのも申し訳なく思つて遠慮したのでした。島のグネグネした道を車の助手席に乗つて移動しながら、お互いの自己紹介の様な話をしたり、他のアーティストや展覧会の話をしながら過ごしました。そのうちに、「ところミュージアム大三島」という不思議な美術館に到着しました。大きな階段状の展示室を下へ下へと進んでいく作りになつた美術館で、彫刻作品が多く展示していました。どんな経緯で何の因果でこの場所にこの作品たちが展示されているのだろうかとぼんやり、最下層の海に向かつてひらけた場所で座つて考えました。周山さんが昔はここでコーヒーが飲めたけれどコロナの後にそのサービスが無くなつたという話をされていて、どんな場所にも歴史があるんだなあと、海の小さな島々を見つつ思いました。相當にボーッとしていたんだと思います。だからという訳でもないのですが、もうひとつ今治に行つたら調べてみたいと思つていたけれど、言い出せなかつたことがありました。それ

今治滞在記

うちに車は島を離れ今治市街地に差し掛かっていました。

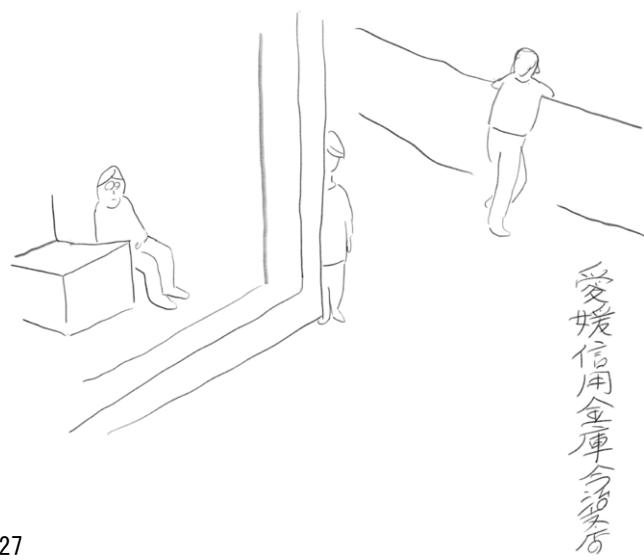


は、蛸釣陶器と呼ばれるもののことです、それがつた場所に行ってみたかったのでした。蛸釣陶器というのは、つまり、タコが陶器や貝殻などの穴のあるものに入り込み棲家とする習性を利用して、タコに紐をつけて海底から拾わせた陶器のことです。よく知られている蛸壺漁は、タコが好きそうな壺を沈めてタコを取る漁法ですが、タコは思のほか綺麗好きでツルツルした表面のものを好むそうでタコに壺に入つてもらうには壺中を綺麗にする必要があるそうです。つまり海底に沈んだ陶器はタコにとつては魅力的に映るようで、そうしたタコの気持ちを利用してトレジャーハントしたのが蛸釣陶器というわけです。これは寝ぼけた私が突然言い出したこととかではありません(今治・タコ・陶器で検索してみてください)。この背景には、今治周辺の海の交通事情(海難事故で沈んだ船が少なくなく、その積荷に多くの陶磁器が含まれていたこと)があります。そういう訳で、一九世紀には、タコによって陶器の存在が示されると潜水夫によって取り尽くされてしまうこともあつた様ですが、そうすると、途端に話がつまらなくなってしまいます。やはりタコが取つてくれる、人間の意思を離れたところからやつて来るところに魅力があるのだと思います。それにしても、あの柔らかいタコにどうやって紐を縛り付けるのだろうかという謎が残ります。という様なことを考えながら、しかし蛸釣陶器のことを説明するだけで(タコと壺が若干異なる意味で何度も登場してくるから)ややこしく、しんどくなる感じもあり、その時の私には、そこに行きたいと言い出す気力が全くありませんでした。そうしている

今治の市街地では丹下健三の建築を案内してもらいました。私はそれほど建築に詳しくありません。建築家の名前くらいはわかるけれど、どんな作風で何を考えていた人かまではよく知りません。しかし、丹下健三については広島平和記念資料館あたりをやっている関係で大雑把にどんなものを造っているか、作風くらいは理解しているつもりでした。最初に「今治地域地場産業振興センター」というところに行きました。そこには円形のホールがありました。なんでもそのホールは、展覧会の会場としても使われることのある、東京の青山パイラルの建築家は丹下の弟子?にあたるとかで、丹下はそうして身近な建築家の作風を踏襲しているのではないかとのことでした。青山のスパイラルといふ建物のイメージが取り入れられているのではないかとのことです。要するに自分が良いなど思ったものを取り入れていくということは、非常に効率の良いやり方な訳ですが、しかしこれは一步間違うとパクリということにもなりかねないとと思うのですが、その辺は世界的建築家として、うまくかわしているようです。あまり細かいことは覚えていませんが、そんな話だったと思います。美術の世界でも、この作品あの人のおアイデアをパクつたんじゃないのか?という疑念を抱くことはよくあることです。実際にパクっている人もいると思います。しかし知らないという影響を受けてしまうことはどんなことにもどんな人にもあるもので、この線引きは難しいと思いました。その後に「愛媛信用金庫今治支店」を訪れた。

施設の方が親切に対応してくださいました。先に見た「今治地域地場産業振興センター」は一九八五年に建てられたのに対し、この「愛媛信用金庫今治支店」の方は一九六〇年竣工といふことで大分古いもので、確かに建物もその設えも異なるものでした。ドアの取手とか細かな金具までこだわりが見られ、独特のかっこいい空間が広がっていました。「ワーレスはすごい」と皆、端々で感嘆の声をあげ、自然に「ここなら展示てもいいな」「展覧会できるな」という感じになっていました。一方、私は「来る途中にあつた疲れがまたぶり返したような感じになつて、状況にうまく反応できず、割と静かにしていました。それから屋上に上がって風に当たつて今治の街を眺めて少し落ち着きました。それで一〇人くらいの人間の束でうろうろしていましたが、いつの間にか一人になつてきました。この建物の屋上は入り組んだ構造になつていて、迷路というほどでもないけれど、エッシャーの騙し絵のような感じの虚の空間がパラパラあつて、思い思い自分の心境にフィットする場所でくつろいでいるようでした。ちょうど太陽が沈んだ頃で薄暗い明かりが印象的でした。その後、歩いて数分のところにある今治市庁の建物を訪ねた頃には、辺りはもうすっかり暗くなつていました。という記憶だけど、実際にはそれほど暗くなかったかもしれません。目を瞑つていたはずはないので、やはりもう夜になつっていたのだと思います。丹下のことはそんなに好きではないけれど、彼の建築を考える大変良い機会となりました。その後、夜に皆で食事に行って一日が終わりました。

今治滞在記



今治でどこか行つてみたいところがあるか?と事前に聞かれた時に、私は芸予要塞をリクエストしました。芸予要塞というのは、今治市のウェブサイトによると、日露戦争当時、ロシア艦隊の来襲に備えて造られた要塞とのことで、それまで長崎の対馬で同じ時代の要塞を見たことがあったので、今治ではどんな感じか、保存状態が良いとの前情報もあり訪れてみたいと思ったのでした。芸予要塞は小島という小さい島にあって船で行かなればなりません。波止浜港というところから船に乗りました。この時は地元のガイドさんが案内してくださいました。ガイドさんは八〇代のお爺さんで、確かに、高松で生まれて今治に来たとか、そんな話をされていました。小さな船で十分くらい波に揺られて小島につきました。島についてからは、要塞のある場所まで歩く訳ですが、どのくらいの距離か忘れましたがなかなかの山道で、しかも道のあちこちに猪が体を擦ったあの独特の跡があり、(猪についているマダニが落ちるため)マダニを恐れている私は気が気ではなく、また体力もなく、一瞬で汗だくのヘトヘト(ペトベト)になってしまいました。道中、ガイドのお爺さんが八〇代とは思えないほど元気な方で、木の棒で、道にかかる蜘蛛の巣を払い、時々そばに生えた木を叩いてみたりと軽やかな気遣いをしてくださいました。それなのに私は全然余裕がなく自分のことばかり考えてどうしようもないなど反省しました。そうこうしているうちに、要塞に到着しました。要塞の建物自体は、対馬のそれとほ

とんど同じ感じでしたが、確かに保存状態は良いようを感じました。観光のルートとしてかつて整備していたからか、あるいは要塞として使われなくなつた時期が比較的早かつたからか、実戦で一度も使われなかつたからか、詳しい理由はわかりません。印象的だったのは、ガイドのお爺さんが教えてくださつた話で、一九二六年の八月一五日にこの小島の要塞施設を標的にした爆破演習が行われたという話で、日本の陸海軍が小島に目掛けた爆破演習を行つたが、一週間にわたる演習にもかかわらず、破壊されたのは北部砲台の一角だけで、演習の開始時には周辺に大勢の観客が押し寄せたが、あまりにつまらないのすぐには誰もいなくなつたという話です。思い通りに行かないことは、大きなことにも小さなこともあります。うまくいかない方が良いことだつてあります。この時の軍事演習もそうでしようが、私たちも芸予要塞の小島を甘く見ていて汗だくのドロドロになつてしましました。一応断つておくと、私は戦争遺構に興味を持っていますが、それは戦争が怖いから、戦争がどんなものだったのかを理解したいという思いからです。決して軍や戦争、武器や兵器が好きというのではありません。ですから、この芸予要塞の旅は汗だくのドロドロの状況にピッタリ、嫌な気持ちにちやんとなりました。それで良いのです。やはり戦争は最悪だなと思いました。ガイドのお爺さんからは元気をもらいました。

今治滞在記



芸予要塞に行った同じ日の夕方からはトークイベントでした。もう何を話したかは忘れてしまいましたが、ともかく盛況で、今治だけなく様々なところから、遠くは別府からもお客様が来てくださいました。大学時代の友人は誰も来てくれませんでしたが、来てくださった方が友人の友人であつたり、話が弾みました。ギャラリーをされている方や芸術祭の様な事をされている方もおられて、今治周辺で様々な芸術活動があることを初めて知りました。京都のように湿った感じではなくて、皆さん瀬戸内っぽいカラッと爽やかな方達ばかりで、とても希望を感じました。周山さんの活動や、それぞれの活動がうまく交差し結実すれば面白い展開がありそうだなと思います。ともかく、皆様温かく迎えてくださって本当にありがとうございました。さて、トークそのものは別に記録もあることだと思いますのでこのくらいにして、ここでは他に印象的だったことを少しく述べて、この感想文のようなものを締めくくりたいと思います。トークイベントの前になぜか奇妙にまつりした待ち時間がありました。私は芸予要塞のドロドロを拭すべくユニクロで新しいTシャツを買うことを目論んでいました。市街地なので、すぐ近くにあるだろうと思い込んでいたのですが、近くに店舗がなく、歩いていく気持ちは一瞬で消えてしまいました。代わりにスッキリする濡れたやつ、アレはなんというのでしょうか、スースーしてスッキリするコンビニで売っている体拭くものを買いにコンビニに行くことに

しました。道すがら、なぜか今治の街が少し違つて見えたような気がしました。それもそのはずでしたので、その時が初めて日中に今治の街中を自分の足で好きなように歩いた瞬間だったのです。同じ道でも移動する速さによって見えるものが違います。トークイベントの会場からコンビニまでは多分三〇〇mくらいしかないので、途中に大きなスーパーがあつたり、そのスーパーにはトイレがあつたり、ビルの空き店舗がチラホラ目立ち、商店街にはほとんど人がいませんでした。こうした風景は今治らしいものというよりは日本どこにでもある風景でわざわざ書くようなことはないかもしれません。しかしそれでも、そこにありのスーパーが、その土地しさが滲むというものです。同じように見えるコンビニひとつとっても実際には地域性のようなものが漂っています。それでは何が見えたのか、何か変わったことがあつたのかと問われれば、特に何かを見たわけでも何があつたのでもありません。しかし何か新鮮な、微かな未知との遭遇の瞬間の目前だったような、世界を区切る透明な膜の横を通り過ぎたような、そんな気がします。あと数日滞在したら、もう少し今治のことが理解できたのではないかと思います。期待を込めて、それはまた別の機会に。（黒田）

今治滞在記



夜

型なので二時間くらいしか寝られず、始発に近い電車で向かった初めての成田空港。東京の西側からだと遠く、おまけに今回乗る飛行機は、駅に着いてからもターミナルまでの道のりが長かった。いったい何の因果でこんなことに：

と思ってしまいそうになるが、前日に早寝すればいいだけの話ではある。そもそも朝型の方が社会に適合できるのに、どうしても夜型になってしまふ。時間配分もいつもギリギリで、遅れてしまふこともしばしば。今回はこの文章の提出が大幅に遅れてしまった。周山さんをはじめ、同行した赤羽くん、諫山くん、黒田くん、そして Imabari Landscapes They Saw 2024 に選ばれた人たちに、心からお詫びしたい。

滞在に関しては、とにかく遅れずに今治に着くことを心がけていたので大丈夫だった。運よく搭乗手続きを完了したときには、無事に滞在を終えたような清々しさすらあつた。機内に乗り込むと、すぐ後ろの席に赤羽くんらしき人を見つけたが、そのときは話しかけなかつた。人見知りではないが、そういうことがある。

松山空港の出口で赤羽くんと合流し、周山さんの車に乗り込んだ。そこに諫山くんも加わり、「伊豫水軍」で昼ご飯を食べた。鯛の釜飯、刺身、天ぷらという、いきなり豪華な定食。入店後に案内された席が窓側じゃなかつたので、周山さんが「海が見える席にしてくれたらいいのにケチだなー」と店員さんに聞こえそうな大きさの声で言つていたのがおもしろかつた。その後、無事に席を介護の仕事について興味深く聞きながら並走していたのもつかの間、ものの二合目くらいで、二人とも坂道を登り続けるのがしんどくて会話どころじやなくなつた。いつたん自転車を置いて、後から来た周山さんの車に乗せてもらうことになり。最初から車に乗つっていた諫山くんの冷静な判断は正しかつた。頂上にある展望台は、今の自分たちと同い年くらいだった隈研吾による設計で、眺めはもちろん素晴らしいのだが、そこに至るまでの視線の展開が、空間によつて見事に設計されていた。帰りは下りなので、再び快適な自転車の時間が訪れた。夕陽が差すエモい写真を…と思つて撮つたが、今度は指が入つてゐんです。

夜は周山さん行きつけの「鳥林」へ。今治の焼き鳥は串に刺さつてない上に、鉄板で焼かれていった。自分が知つてる焼き鳥という料理は、串に刺さつてあることがアイデンティティだつたんだと知る。せんざんきという骨付きの唐揚げも食べた。ビールに合いそうだなあと思つながら、お酒が飲めないのでコーラを飲む。うまい。そのあとは「ジャグ」という喫茶店へ。ひと癖ありそうなマスターと、いい感じの店内。ここぞとパチリ。もちろん真っ暗。

今治の風景

Jujirō Makie



そのあと予定表にはなかつたが、周山さんの家に少しだけ寄ることになり、コレクションを見せてもらう。一風変わつた建物で、室内にはたくさんの作品や風情のある家具など、周山さん夫妻が気に入つたものに囲まれた空間が素敵だった。



「株式会社丹後」でタオル工場の見学。案内してくれた丹後さんの話ぶりに引き込まれる。工場内では、つい機械のロゴや段ボールに印刷されたグラフィック的なものに目が行く。デザイナーか、と自分にツッコむ。まあ今回の参加者でデザイナーは自分だけなので、こんなものを撮る人はいいな。いろいろと写ルンですのシャッターを押した。しかしフラッシュを焼き忘れて、写らないんです…という凡ミス。

移動でき、海を見ながら食べてもらいたいという周山さんの願いは叶つた。願いは口に出せば叶う。実際に景色も味もおいしくて満たされた。今治に来てよかつたと、もう思った。



初日から充実していた。こんなにしっかりと観光したことはないかもしれない。宿は「サンライズ糸山」。慣れない場所で相部屋だと眠れないので、わがままを言ってひとり部屋にしてもらつた。特別扱いで申し訳ないが、よく寝て朝を迎えた。

二日目は、しまなみ海道で尾道市の生口島に行き、そこからフェリーで隣の島にある岩城造船へ。周山さんのパートナー、あきちゃんが案内してくれた。昨日、しまなみ海道の橋がでかすぎる人工物であることに思いを馳せたが、造船もやばかった。全長二〇〇mの船を、人間が鉄を切り貼りして造っているという。土曜だったので作業はしてなかつたが、加工の途中で置かれた鉄板や、そこに走り書きされたメモなどの痕跡から、造っている様子が目に浮かぶ。目の前にそびえ立つ、もはやスケール感のわからない大きさの船が、人の手で造られているという事実にくらくらする。「もはやアート」という言い回しを見聞きすると、アートのことを局的に捉えてるなあと思つてしまふが、もはやアートです。別の造船所では全長四〇〇mのコンテナ船を造つているらしい。どうかしている。

その後に見た耕三寺もすごかつた。実業家の耕三寺耕三による母への想い、その強すぎる気持ちで造りあげた異色の寺。ひ孫の耕三寺さんに案内してもらつた。造船所でひとしきりやられた後に見たせいもあり、見所と情報量の多さでキヤバオバー。崇高なの、胡散臭いの、どっちなんだい。

腹ごなしに、海沿いにある宮脇愛子の「うつろひ」を見た。従来のマッチョな彫刻ではなく、しなやかな彫刻というものを打ち出した人だと諫山くんが教えてくれた。大三島へ移動して、運悪く遅れての参加になつた黒田くんをバス停で待つ。赤羽くんと諫山くんが外でタバコを吸つてゐる間、周山さんと車の中で、よくこんな企画を定期的にやつてるねという話をした。綿密なスケジュールを立て、いろんな人にガイドを頼み、道中ずっと車を運転する、その労力。しかもすべての滞在費を自費で負担しているという。なんでそんなことを?と聞くと「好きなアーティストを地元に呼んで、四日間ずっと一緒に過ごすことがおもしろいから」と言つていて腑に落ちた。アーティストのインプットや、地元のアートに対する意識を活性化するなど、他人や社会のためが第一ではなく、そもそも自分のためにやつてゐるんだぞ。

大三島の「どころミユージアム」という気持ちのいい現代美術館でのんびりと作品を見てから、今治市の市街地に戻つて丹下健三の建築めぐり。建築家の長井さんによる、丹下愛のこもつた視点から、地場産業振興センターと愛媛信用金庫今治支店を案内してもらう。信金は職員の方のご厚意によつて、屋上まで隅々と見ることができる貴重な機会になつた。事前に周山さんから、長井さんへ

今治の風景



の手土産を頼まれていて、フェイスブックを見た。岡スパイクス」のカレー粉二〇種類セットをあげた。数日後にそれを使ったカレーを投稿していくと安心。夜は「頬登」で、おいしい刺盛りなどは話すのが本当に好きといった感じで、映画の話を延々としていた。周山さんはもういいよと言っていたが、諫山くんはちゃんと話に乗つて好きな映画の話をしていた。自分は食べながらそれらの映画をメモした。

翌朝は、「珈琲道場」でモーニングを。その向かいにある河野美術館の一角に、阿部誠一の「女（下着）」という「いタイトルのブロンズ像があった。それを検索してて見つけた「裸婦像美術館」というウェブサイトもなかなか。街なかに突如現れる裸や薄着の女たち。それが成立した時代は、ポリコレの現代からは遙か遠くに感じる。



今治の風景

「かねと食堂」で昼食。カツ丼が好きなのでカツ丼にした。カツ丼はハズレがなくて大体うまい。うまいのに、赤羽くんと諫山くんが食べていたカツカレーがもっとうまそうに見えた。ひと口もらえばよかつたが言えなかつた、と店を出てから言つた。

喫茶「アポニー」に移動して、今夜のトークに向けたゆるい作戦会議。まつたりした時間を過ごす。ずっと移動やインプットをし続けていたので、いい意味での余白となつた。ちなみにここは周山さん主催の別企画「ART SANPO」の会場のひとつでもあり、その告知物を数年前から「デザインしている自分としては、ついに来訪できてちょっと感慨深かつた。「美太に」や「OTTOMANI」にもぜひいつか行きたい。コーヒーフロートを飲みながら、たまたま「芸術激流2024」というアートイベントの告知インスタライブを、佐塚くん（国立奥多摩美術館の館長）たちがやっていたので、みんなで見てコメントした。画面に表示された視聴者数は、自分たち以外はひとりだけだった。



フェリーで小島へ渡り、黒田くんが行きたがっていた芸予要塞へ。葛西さんというガイドのおじちゃんが、八〇代なのに山道や階段を難なく登り、よく喋るので驚いた。戦時中の話を聞いていたのに、当時は多くの人が勝つと信じさせられていた、信じたかったんだなど、涙ぐましい気持ちになる。



宿に帰り、大浴場に行くと、自分以外の三人が飲み会の熱も冷めやらぬという感じで話し込んでいた。この夜がImabari Landscapesのクライマックスだったようだ。

そういうえばトークの後、テンション高めのおじさんから「今日もっとも心を動かされた人に、プレゼントをあげようと思って！」と発泡酒を一缶もらったのだが、飲めないので赤羽くんにあげた。翌日、赤羽くんは「宿に置いてきた！」と言っていた。

四日目の朝はカフェレストラン、アメリカへ。フレンチトーストを頼んだら、味噌汁がついてきた。前夜、お風呂で話していた交通費の相談を、黒田くんが周山さんに持ちかけていたが、その場ではいったん保留に。食後、周山さんが運転する車の中で、赤羽くんがアーティスト・イン・レジデンスに参加する際のアーティストの立場から、黒田くんの要望について丁寧に補足をしていた。赤羽くんはなんていい人なんだろうと思った。後日、その話は無事に丸く収まつたようだ。

その後、さくっと今治駅でみんなと別れた。怒涛の三日間だったので、ちょっと名残惜しかった。赤羽くんが「みんなと一緒になったのがグランピングだここまで仲良くはなれなかつた」と言つていて同感。そこから特急しおかぜで約二時間、滞在中は交流の浅かつた黒田くんとノンストップで話し続けた。岡山に着く頃には、寂しさは跡形もなくなっていた。



今治の風景

今回の滞在では、今治の魅力を実感しすぎて、地元の岡山よりも詳しくなったかも知れない。好きな町は？と聞かれたら、盛ることなく今治だと答えられるだろう。周山さんのおかげである。最終日に四人から花束のひとつでも渡した方がいいのでは、とすら思っていた。実際には渡さず、最初に提出した文章はひどい内容で、書き直した文章除む締切を破り倒し：むしろ恩を仇で返しまくつているが、心から感謝している。本当にありがとう。

赤羽くんは気の向くまま自由な感じ、という意識があるのかどうかはわからないが、その穏やかでオーブンな空氣感と、時折見せる鋭さが印象的。諫山くんははじめて、人に合わせる優しさに親近感を感じるからか、接しやすい。黒田くんは饒舌なのに不器用で、アンバランスな魅力がある。思い返してたら、またみんなでご飯でも食べたくなってきた。周山さん企画お願いします（牧）



— ○一四年一〇月六日一六時三〇分より、ト
ークイベントを広小路通りに面した場所に
あの今治木木座で実施しました。

Imabari Landscapes 鳴近じトークがあの暮ら
~アート・イスト~会場ねり編 vol. 2~

日程：一〇一四年一〇月六日(日)

時間：16時30分～18時30分

料金：一千円

会場：今治木木座(今治市共栄町一一二一一)

トークイベントでは冒頭、一五分ずつの持ち時間
でゲスト四人からこれまでの活動についてのお話
を伺いました。その後休憩を挟んで、「身近にア
ートがある暮らし」について一問一答のディスカ
ッションを行いました。



トーカイ ベントを 振り返る

Q. アート／美術との最初の出会いは…

赤羽「美術を広く捉えると、漫画との出会いで
す。父親の影響で、水木しげるや、つげ義春な
ど、ガロに載っている漫画をよく読んでいまし
た。現代美術はテレビで奈良美智さんのドキュメ
ンタリーを見て、ファンになったのが最初の出会い
です。」

黒田「元々、作ったりするのが好きなタイプの子
供でした。母親が芸術学部のある学校を卒業して
いて、学校の同窓会の卒業制作展の図録が家にあ
ったのを読んでいました。」

諫山「小学生の時に大原美術館で吉原治良の作品
を見たのを記憶しています。あと、高校生の時に
名古屋市美術館で観たボルタンスキーオーの作品にも
感銘を受けました。」



Q. アーティスト／美術家／デザイナーの道を選んだきっかけは？

黒田「高校進学するときに、魚釣りばかりしていたので漁師になろうと思っていました。けど、周りに諭されて、美術の高校があることを親から聞いて、絵の勉強を始めて、これだ！つとなりました。それまで、ストレスから解放された実感がありました。」

牧「大学の図書館で、『デザイン年鑑』という『デザインがたくさん載っている分厚い本を次から次へと見ていたら、自分でもできそうだなと思ったのがきっかけのひとつだと思います。』

Q. 制作スタイルは？（制作場所、時間、アイデアの練り方など）

赤羽「制作場所はスタジオで、時間は娘を学校に送り出した午前九時から、娘を学童保育に迎えに行く午後六時までという感じです。自然光が入っている時間帯が良いです。アイデアは車を運転しているときに閃くことが多いです。」

牧「主にパソコンの前で、たまに印刷会社など。オンラインオフの切替えがないで起きている間は何かしら考えたり作ったり、さぼったり。アイデアは依頼人と話していると浮かぶことが多いです。」

諫山「アトリエでひとりでやっています。時間は日中。アイデアの練り方は本を読んで、作ってみて、今まで制作した作品と対話しながら作るのがやりやすいです。」



振り返るベントークイント



Q. 作品制作の醍醐味は？

諫山「自分が見たことないものを自分が最初に見られるのが面白いです。」

黒田「作る喜びがあります。作ったものを展示した後に喜びを感じることもあります。僕の好きな作家に、百年前くらいに活躍した作家がいるのですが、その作家の催しに行つたとき、あまり知れていない作家にも関わらず、様々な場所から訪れたいろんな人がその作家について語っているのを見て、作品の力を感じ、身が引き締まる気持ちになりました。」

牧「いいアイデアが浮かんだとき、デザインを見た人から反応があつたとき、賞をもらつたとき、それぞれの嬉しさがありますが、完成したときに自分の中に手応えがあることが大切です。」

赤羽「展示会場に入った時が嬉しいです。その瞬間に達成感を感じます。」

Q. 気になるアーティストの共通点は？

赤羽「僕が絵を描いているので、絵を描いている人が気になります。全然気にならないアーティストの方が多いです。二年前、パリでゴッホの作品見た時は、刺さりすぎて涙をしてしまいました。」

牧「作品になんとも言えない魅力があること。コンセプトや作り方も面白いと更に気になります。」

黒田「展覧会を企画することもあるのですが、その時に伸びるなと思うアーティストは、自立している、独自性がある、しつこいっていうのがあります。自立している、というのは経済的にというよりは、どこいってもやっていける力があるという意味です。」

諫山「アーティスト自身には興味はないで、作品に興味があります。シンプルなアイデアなのに光るものがあるか、が大事です。」

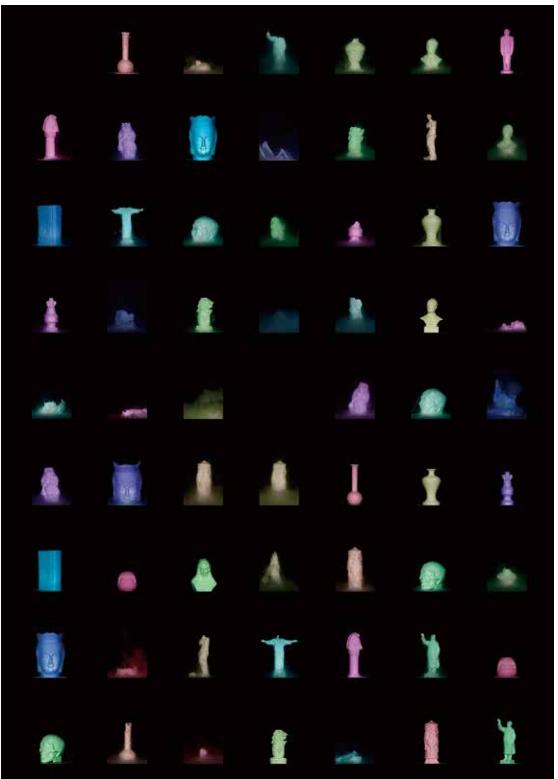


赤羽 由帆
Akahane Fumiaki



「Soil Psychedelia」
木材、ペーパー、糸、土、ビニル、番線、コットン、麻袋、麻紬、ボンド、ジンバード、アクリル、砂、麻繊維、蜜蠟、綿水糸、チャイナ、カーネル
2780 × 5200 × 970mm
「赤羽由帆 SOILS AND SURVIVORS」(2023)
謹賀市美術館
© Fumiaki Akahane, Photo Go Itami, Courtesy of CAVE-AYUMI GALLERY

アートストップ



《Objects #21 (輪介)》(2023)
ヤマト木(ルーフ、無恤)

一九八四年 長野県生まれ。長野県茅野市在住。
二〇〇八年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。生命の根源的な力をテーマに、過剰な物質感が伴う絵画、立体作品を制作。併び展覧会「個展」「Soil Psychedelia」(CAVE-AYUMI GALLERY 東京、2023)、「個展」「SOILS AND SURVIVORS」(謹賀市美術館、2023)、「ART SANPO 2023」(Imabari Landscapes' 美媛、2023)、「VOCA 腕2023 岐阜美術の展望—新しい平面の作家たち—」(上野の森美術館、2023)などがある。

一九八七年生まれ、広島県在住。二〇一一年 広島市立大学芸術学部博士前期課程修了。共同アトリエ「スタジオ」にて精製された土、マネキン、観葉植物と戯れながら、複製物のオリジナルアートを日々探しながら制作している。また学生と学芸員とアーティストが、作品制作の思考プロセスや技法について対話、考察を継続していくブログ「Pink de Tea Time」の企画を行な。最近の主な展覧会「個展」「Dollie」(hakari contemporary 京都、2023)、「カーネル」(謹賀世祭)、「現代地方譚11:郷と土のせな」(やわらかあいだむきやうこーへ田川津邸ほか、高知、2023)などがある。



謹賀 由貴
Genki Isayama



黒田 大輔
Daisuke Kuroda

一九八二年京都府生まれ。一〇一三年 広島市立大学大学院博士後期課程(彫刻)修了。取材を基に、社会から流れられたような存在に光をあてるよう、作品を制作している。時々、展覧会も企画。最近の主な展覧会は、「Art resonance vol. 01 時代の解凍」(芦屋市立美術博物館、一〇一四)、「ノンケンノン・バイライト+ノンケンノン・コレーショナーズ「村上友重+黒田大スケ・広島を覗く」」(広島市現代美術館、一〇一三)、「DOMANI・明日展 2022-23 百年あるなんがねえ。」(龍木製陶所「常滑」、一〇一三)

アーティスト



『芸術激流 ラフティング+アート』二〇一一
トレーシングペーパーにレーザープリンタ、川に
流してあとで乾燥

The 7th Changwon Sculpture Biennale “silent apple” 2024 Exhibition installation view, 2024, Photo by studio SUJKSUPYUNG (Cheolkit Hong), Courtesy of Changwon Cultural Foundation . The 7th Changwon Sculpture Biennale 2024



牧寿次郎
Jujirō Mak

一九八五年岡山生まれ。武蔵野美術大学卒業。東京にてアーティランスのグラフィックデザイナー。企画、レコード、CD、印刷、流通などのプロセスにおいて独自性を探る。主な仕事に、展覧会のチラシ「芸術激流 ラフティングアート」(多摩川、国立奥多摩美術館、110-111)、「光國幸一展 ぶつねれのゼットー 110%」(ガーディアン・ガーデン、110-111)、書籍『大前栗生 柴犬』(書肆侃侃房、110-111)、雑誌『広告 Vol. 413~417』(博報堂、110-111)、カレンダー「アイデア ニューカレンダー」(誠文堂新光社、110-111-110-111)などがある。

Imabari Landscapes LLC、「島近リゾート」がある暮ら」をロゴセイドー、二〇一八年から愛媛県今治市で実施しているアートプロジェクトです。国内外で活動して「島近現代アート」に関わる人ひとを招聘し、旅をする企画「Imabari Landscapes They Saw」からスタート。JR新山口駅二〇一八年、二〇一〇年、二〇一一年、二〇一二四年の四度にわたり計一六名のゲストを迎えてきました。新型コロナウイルス感染症の拡大により、人の移動が難しくなった二〇一一年から、今治市内の店舗を人の代わりにアート作品が回遊する展覧会「ART SANPO」を開始しました。また二〇一二年には、今治市の委託を受けて、「アーティスト・イン・今治」の企画運営に携わりました。

「シニヤ

Imabari Landscapes LLC、地域に住む一人一人が「画一的になる」となく、多様で、自分らしい生き方を選択できる土壤を醸成していきます。そういった生き方を選択できる扉の一つとして、本プロジェクトは「アート」を切り口に企画・運営しています。アートをはじめとする「文化」には、他人や異文化を知り、好奇心を掻き立て、まだ見ぬ世界を開く役割があります。本プロジェクトは、同時に生きるアーティストや、彼・彼らの作品を街に接続する」と、アートの思考に触れる機会を創出する」と、アートの思考に触れる機会を創出する」と指しています。

プロジェクトの紹介

1. Imabari Landscapes They Saw

二〇一〇年三月から新型コロナウイルスの影響で人々の移動が制限されたため、アートに関わるゲストは滞在中、今治市内の観光名所などを訪ね、サイクリングや釣りといったアクティビティ、史跡訪問などを通して今治の歴史や文化を知る時間を過ごします。最終日にはトークイベントを実施し、今治に住む方々とアートの可能性や、街の今後について意見交換も行います。

2. ART SANPO

二〇一〇年三月から新型コロナウイルスの影響で人々の移動が制限されたため、アートに関わるゲストは滞在中、今治市内の観光名所などを訪ね、サイクリングや釣りといったアクティビティ、史跡訪問などを通して今治の歴史や文化を知る時間を過ごします。最終日にはトークイベントを実施し、今治に住む方々とアートの可能性や、街の今後について意見交換も行います。

3. アーティスト・イン・今治(主催:今治市)

日本国内で活動するアーティストを今治市内に招き、地域との交流を進めます。「まちなか」のパブリックスペースにおいて制作活動を行うことで、地域の方々に身近にアートに接する機会を提供しながら、アートの切り口から「まちなか」の賑わいや新たな魅力の創出を図るプロジェクトです。

Landscapes Imabari



110-1 八
10:30

[Imabari Landscapes They Saw 2018]
作家：小畠太郎、森田畠林、飯川雄大、
佐塚真路

110-2 十
10:30

[Imabari Landscapes They Saw 2020]
作家：小畠太郎、前谷闇、和黒健一、
堤拓也

110-3 十一
10:30

[ART SANPO 王懸空画@赤壁]
作家：佐塚真路、ナハマキ、永煙智大
展示場所：今治市木木座

110-4 十二
10:30

[ART SANPO 王懸空画@懸けねにてーー]
作家：佐塚真路、ナハマキ、永煙智大
展示場所：四洲書店

110-5 十三
10:30

[ART SANPO 2021]
作家：佐塚真路、ナハマキ、永煙智大、
飯川雄大、村田峰紀、袴田京太朗、
村田聖郎
展示場所：onsa' インターナショナル、
美太」、Apony' Osteria erie
協力：国吉園多摩美術館、onsa'
rin art association

110-6 十四
10:30

[ART SANPO 2023]
作家：永煙智大、村田峰紀、村田聖郎、
下山健太郎
横山奈美
展示場所：onsa' インターナショナル、
美太」 Apony' Osteria erie

110-7 十五
10:30

[Imabari Landscapes They Saw 2022]
作家：赤羽史帆、森田理、小畠太郎、
齋藤雄介、下山健太郎、前谷闇、
横山奈美
展示場所：onsa' インターナショナル、
美太」 Apony' Osteria erie

110-8 十六
10:30

[Imabari Landscapes They Saw 2024]
作家：小畠太郎、井嶺：今治市
企画・運営：Imabari Landscapes
展示場所：赤羽史帆、謙山次貴、
黒田大スケ、牧寿次郎

6

Landscapes と は?

110-9 十七
10:30

[ART SANPO 2025]
作家：岡本秀、木村桃子、高橋大輔、
竹崎和征、竹崎瑞季、手嶋勇氣、
早川祐太、若林菜穂
展示場所：木木力「珊瑚、OTTOMANI、
onsa' sotosu」森、美太」
協力：ANOMALY HAGIMARA PROJECTS、
MISAKO&ROSEN' TAKEJIROZABURO

110-10 十八
10:30

[Imabari Landscapes They Saw 2018]
作家：小畠太郎、前谷闇、和黒健一、
堤拓也
展示場所：木木力「珊瑚、OTTOMANI、
onsa' sotosu」森、美太」
協力：ANOMALY HAGIMARA PROJECTS、
MISAKO&ROSEN' TAKEJIROZABURO

110-11 十九
10:30

[Imabari Landscapes They Saw 2020]
作家：小畠太郎、前谷闇、和黒健一、
堤拓也
展示場所：木木力「珊瑚、OTTOMANI、
onsa' sotosu」森、美太」
協力：ANOMALY HAGIMARA PROJECTS、
MISAKO&ROSEN' TAKEJIROZABURO

110-12 二十
10:30

[ART SANPO 2023] 展示風景
赤羽史帆《Morning Dew(study)》(110-11)
《spore》(110-12)を
sotosu(左)、onsa'(右)にて撮影



[トートバッグ・バッグ・今治]
オーバーハングする木の様子
今治市立中央図書館にて撮影



発行日 二〇二四年七月一日 初版第一刷

発行者 周山祐未

編集 周山祐未

編集協力 西岡一正

デザイン 牧寿次郎

撮影 赤羽史亮

諫山元貴

黒田大スケ

牧寿次郎

加藤淳一

表紙(上)、P1、4
表紙(下)、P2、16
S21

裏表紙(上)、P22
S31

裏表紙(下)、P32
S39
52 48

P40(下)、43

問い合わせ・企画・発行

Imabari Landscapes

imabari_landscapes.com



Instagram @imabari_landscapes



Daisuke Kuroda

支
gar i
capes

Saw

4



Jujiro Maki

